

# 『豊かな生を地域で支える会』抄読会のご案内

拝啓 皆様にはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素は、『豊かな生を地域で支える会』にご協力を賜り、まことにありがとうございます。さて、『豊かな生を地域で支える会』の抄読会を下記日程で開催いたしますので、ご多忙と

存じますがご出席下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

ご出席可能な方は、3月1日(土)(厳守)までに参加申込書にご記入のうえ、FAXまたはメールにてご返信願います。

記

## 「岡田圭先生を囲んでの抄読会」

※岡田圭先生の著書「いのちに驚く対話-死に直面する人と、私たちは何を語り合えるのか」を事前にお読みいただきますようお願い申し上げます。(当日、ご持参願います)

死を前にした人の想いを深く読み解き、それぞれの思いが分かち合える場になることを願います。

日 時 : 令和7年3月8日(土) 14:30~16:30 (14時開場)

開催場所 : ガレリア亀岡 チャペル (裏面をご覧ください)

<前回(2/1)の抄読会は神山 順先生が担当しました。概要は下記のとおりです>

～ 中澤まゆみ著 宇都宮宏子協力 「いえに戻って、最期まで」の抄読と意見交換 ～

なぜこの本が生まれたのか? 著者は「母92歳は自宅で、父96歳は医療療養施設で、友人89歳は特別養護老人ホームで看取った。その中で、母と友人については“できるだけことはやった”という納得感があったが、父については後悔が残った」と言う。「当時父は要支援2から要介護1になったばかり。念のための検査のため2週間程度入院したが、退院前日、誤嚥性肺炎を起こしたことで入院が長引き、1カ月あまりの間に“寝たきり”になってしまった。病院での“安静仰臥”が引き起こす弊害、短期入院で認知症が一気に進み、“寝たきり”になったことを思い至らなかったことが、この本を執筆に至った動機だった」と。

宇都宮氏は、病院現場では患者を“ひとりの生活者”ではなく“治療の必要な人”としか見ない傾向はまだ続いていると言う。また、病院も家族も“病気を治す”ことにしか意識が向いていないことに加えて、経過報告や治療方針が本人不在になりがちである。人生を生きてきたひとりの人間として、医療者も家族も考えることが必要であると言う。抄読会参加者も、在宅医療とケアを支える専門職として、新ためて胆に銘じておくことの大切さを考えさせられた。

また、ソーシャルワーカーの前田さんは、退院時「家は無理だから施設へ」とは絶対に言うてはいけないと言う。患者や家族の意識を「病院から追い出される」から「家に戻れて嬉しい」に変えることが重要と指摘する。病院の地域連携室と地域で支える医療・介護の専門職がしつかりと連携して退院後の生活支援体制を整えることは当然であるが、地域の住民のつながりを交えた地域でのサポート体制が重要であると言う。

訪問診療医の佐々木淳さんは、「家に帰るために」は訪問診療の存在が必須となる。在宅医療が何のためにあるかという、「退院支援を含め入院期間をできるだけ短くし、退院した人の再入院を防ぐこと。本人が望むのであれば、できるだけ最期まで在宅で診ることである」と言う。在宅で死にたいと希望している人に対して、急変時にどこまで本人の希望に添えるのか。また、ACPは「患者の思いが尊重されるための選択肢があるからこそ意味がある。本人の希望に添えるための看護や介護で支える体制が不可欠である」と。“最期の時”をどこで過したいのか、患者さんの選択と自己決定に応えることができる支援が求められる。

## 「豊かな生を地域で支える会」抄読会参加申込書

令和7年3月8日(土)に行われます『豊かな生を地域で支える会』抄読会に参加いたしたく申します。

令和7年 月 日

事業所名： \_\_\_\_\_

役 職： \_\_\_\_\_

氏 名： \_\_\_\_\_

連絡先： TEL \_\_\_\_\_ FAX \_\_\_\_\_

メールアドレス： \_\_\_\_\_

送付先： 特定非営利活動法人 訪問看護ステーションこころ 内  
豊かな生を地域で支える会 事務局 川勝迄

FAX 番号 0771-20-7067

メールアドレス [kokoro414@leto.eonet.ne.jp](mailto:kokoro414@leto.eonet.ne.jp)

(ガレリア亀岡の館内図)

